

この一年 ー平成27年度の図書館ー

文学部史学科教授 図書館長 寺崎保広

何事もなく一年が過ぎるという時もあるが、今年には図書館にとっては、大きな節目となる一年だったといえる。

まず一つ目として、日本考古学協会所蔵の6万冊を超える書籍・報告書が本学に寄贈されることが決まり、図書館で収蔵することとなった。その移行にかかる費用は、学校法人創立90周年記念事業の一つとして行なわれることが認められ、二年間かけて順次、運び込み・整理・配架を行うこととし、その作業が2014年12月から始まった。その内容と寄贈にいたる経緯については、本誌の次号に掲載の予定である。現在、受け入れ作業が終わった分については、一階の集密書庫に配架しており、利用が可能となっている。是非、活用していただきたい。

二つ目は、利用者の方からすると、お気づきでないかも知れないが、図書館事務の運営体制が今年度後期から変更になった。実をいえば、この間、図書館では人員不足によって業務が一時停滞するという状況もあったのだが、それを解消し、より利用者に対する利便性の向上をはかるために、事務部門を外部に業務委託するという方針が決定され、それに従って9月より新たなスタッフが入って、運営がスタートしている。利用者の方への直接的な影響がないように、十分な事務引継を行ない、また、これまで以上のサービスを提供したいと考えているので、図書館に対する要望・意見を、是非お寄せいただきたい。

三つ目は、これも後期からであるが、入館者の確認をさせていただくこととした。奈良大学の図書館は学内だけでなく学外の一般の方々にも開放し、広く利用していただき好評を博している。しかし近年、社会的にさまざまな事件が起こっている中で、現状のようにフリーパスでの入館というのは、保安上やや不安ではないかという指摘があり、それに応えるための一つとして、入館時に毎回カウンターで入館証（学生証・職員証）を提示してもらうこととした。そのため、利用の際は常に入館証を携帯していただく必要があり、ご不便をおかけするが、何卒ご理解の程をお願いしたい。

最後に、4月から図書館長が交代した。前館長の森田憲司先生は無類の本好きで、洋の東西を問わず本についての知識は随一、かつ奈良大学図書館については隅から隅まで何でもご存じという最適任の館長であったが、引き継いだ寺崎は何もわからない素人である。メジャーリーグで、先発のエースピッチャーが7回まで抑えた後、リリーフでマウンドに立った高校球児といった感じである。球威もコントロールもないが、バックに守備陣がいることを頼りに投げるしかない、という心境である。皆様のご支援とご教示を切にお願いしたい。

なお、森田先生は、今年度末をもって定年によりご退職の予定である。これまでの長い間の図書館に対するご貢献に、厚く感謝申し上げる次第である。

企画展示「奈良絵本「花鳥風月」と「文正草子」 付、「大織冠」によせて

文学部文化財学科 教授 塩 出 貴美子

和本の中に「奈良絵本」と呼ばれる一群がある。「奈良」はさておき、「絵本」は「挿絵入りの本」の意であり、現代の子供向けの絵本とは別物の歴とした大人の本である。とはいうものの題材はお伽草子を中心であり、これに『源氏物語』『伊勢物語』『徒然草』といった古典や、表題にある「大織冠」のような芸能ものなどが加わる。つまり、このような話の写本に挿絵を加えたもの、それが、いつの頃からか、「奈良絵本」と呼ばれるようになったのである。制作時期は室町時代後期から江戸時代前期あたりで、挿絵は室町絵巻の流れを汲むが、総じて素朴で稚拙なものが多い。しかし、江戸時代になると、豪華で美麗なものも登場するようになる。

さて、奈良大学図書館は、平成24年度に「文正草子」を、同26年度に「花鳥風月」を購入した。今回の企画展示は、この二つの奈良絵本を初公開するものである。「文正草子」は、常陸国鹿島大明神の雑色であった文太（後の文正）が立身出世する物語で、お伽草子の中でも最もよく知られたものの一つである。本学のものは三冊本であるが、

残念ながら中冊を欠いている。

一方、「花鳥風月」は、さほど知られていないかもしれないが、『伊勢物語』と『源氏物語』を取り込んだ、いわゆる二次創作物である。扇合に出された一枚の扇絵、そこに描かれた一对の男女。その男は、在原業平か？ 光源氏か？ この争論に決着をつけるため、花鳥と風月という梓巫女の姉妹が呼び出される。姉の花鳥が三尺の鏡に男を映し出したところ、その男は光源氏であった。次いで女も鏡に現れるが、女は末摘花であった。おもしろいのは、本編では最も控え目で実直な女性とされる末摘花が、ここでは、光源氏にありったけの恨みつらみを述べ、さらに他の女性たちにも嫉妬心を炸裂させるところである。古典の二次創作が、お伽草子らしい奇想天外な話に展開していく点に特徴がある。

本学の「花鳥風月」は二冊あるが、一組のものではなく、各一冊からなる異本二冊（A本、B本）である。そうすると、いろいろと比較する楽しみがある。図1と図2を見比べてみよう（次ページを見る前に、どこが違うか、考えてみて下さい！）。



図1 「花鳥風月」 A本第4図



図2 「花鳥風月」 B本第4図

まず、本文と挿絵の関係に注目すると、A本は同じページに本文と挿絵が載っているが、B本は挿絵だけで独立している。次に、その挿絵の上下を見ると、A本は曲線をつなげた「雲」を描いているが、B本は直線的な「すやり霞」になっている。人物については、両本とも鏡に光源氏と末摘花の姿が映し出されているが、A本は鏡の左にも光源氏を描いている。しかし、肝心の花鳥と風月は描かれていない。周囲の男たちはB本の方が多い…。

同じ場面でありながら、A本とB本では、このように表現が大きく異なっている。もちろん本文にも異同があり、総合的に考えると、B本よりもA本の方が古いと思われる。

さて、こんなおもしろい題材を、ただ展示するだけでは勿体ないと思い、この機会に、大学院で担当する美術工芸史学特殊講義Ⅱの教材としても活用させていただくことにした。4月の講義は「花鳥風月」を撮影することから始め、しばらくは輪読しながら、翻刻と釈文を作成した。展示も講義の一端として位置づけ、院生たちと計画を練った。

本学図書館の展示室には平面ケースが四つと壁面ケースが一つある。しかし、奈良絵本は「文正草子」二冊、「花鳥風月」二冊、計四冊しかない。スペースを埋めるために、蔵書の中からそれらの影印本や翻刻本を探し出し、一緒に並べた。ところが、悲しいことに冊子本の展示では、どうしても見開き一ヶ所しか見せられない。そこで、本物の奈良絵本については、本学社会学部総合社会学科の正司哲朗准教授に「デジタル奈良絵本」を制作していただき、全ページを閲覧できるようにした。これは、マウスでドラッグするとページを

ペラ〜と捲くこともできるというスグレモノである。しかし、やはり本は手で捲きたいというアナログ派には、「ちょっとミニ複製本」を用意した。こちらは画像をプリントアウトし、本物と同じように和綴じにしたものである。

壁面ケースには、二種類の「花鳥風月」の挿絵をパネルで展示し、あらすじを追いながら、両者を比較できるようにした。また、参考品として、

奈良絵本「大織冠」を絵巻に改装したものの（個人蔵）を展示した。これを置くための傾斜台やパネル、「ちょっとミニ複製本」などは、すべて院生と学生による手作りである。

なお、「花鳥風月」

の翻刻と釈文は、院生との連名で『奈良大学大学院研究年報』第21号（平成28年3月発行予定）に掲載する。一つの奈良絵本で展示と講義と著作ができて、一石二鳥ならぬ一石三鳥の気分である。

最後に「奈良絵本」の「奈良」について一言。語源については、いろいろな説があるが、恐らく奈良の都の「奈良」とは直接的な関係はないだろう。しかし、「奈良絵本」という名称からイメージされる一群の書は確かに存在する。ならば、「奈良」の名を冠する本学図書館は、奈良絵本の収蔵場所として、この上なく相応しいところではないだろうか。今後、所蔵品が増えることを切に願っている。



図3 入口案内とリーフレット表紙



図4 壁面ケースの展示風景

初めて図書館に足を運んだのは小学校低学年の頃だった。母に連れられて地元の市立図書館へ足を運び、そこで初めて見る膨大な量の書籍に圧倒された。大好きだった『ズッコケ三人組』シリーズが小学校の図書室よりも豊富に所蔵されていたことと、迷路のような本棚の列にひどく興奮した事を覚えている。その日、私にとって図書館の印象は、「好きな本がたくさんある楽しい所」というものになった。

中学生、高校生の頃には友達と遊びに行く時の言い訳に使った事もある。「図書館で勉強してくる」と言えば、なかば呆れたような訳知り顔をしながらも母は送り出してくれた。

言い訳ではなく、本当に宿題やテスト勉強に集中しようと通った日もある。興味のある本に囲まれての勉強は、ただ机に向かうよりも楽しく感じられた。

現在の私にとって図書館とは、研究の資料を蒐集するための場所であるのは当たり前で、それと同時に、私個人の生活を豊かにするための場となっている。興味のある文学書籍だけでなく、料理のレシピや旅行のパンフレット、動物の図鑑などを借り、それらで得た知識を普段の生活で役立てたり、日頃は触れる機会の少ない自然科学分野に対しての知的好奇心を満たしている。本学の図書館には所蔵されていないが、他の図書館では童心に帰って『ズッコケ三人組』シリーズを借りる事もある。

研究や課題、家事などをこなす日常的な活動と、自身の内面や願望に目を向ける非日常的な活動。

両方の活動において、必要となる様々な知識や情報を、自ら欲すれば図書館はいつでも与えてくれる。現在の私にとっても、図書館は「好きな本がたくさんある楽しい所」であることに変わりはない。

また、私にとって図書館はアルバイトでお世話になっている場所でもある。主にカウンターでの貸し借りや、返却された本の配架作業を通して経験する利用者の方とのふれあいは、日々新鮮な思いを感じている。このアルバイトを通して、図書館の使い方や図書館に求めるものは十人十色なのだと学んだ。

大学図書館という事もあり、利用者は学生が大半を占めている。そのため、研究のための資料を借りに来られる方が多い印象を受ける。しかしそんな中にも、私のように余暇に読むためと思われる本を借りに来られる方もおり、そのような方に対して、私は親近感を抱いて業務を行っている。更に言えば、私が以前読んだ本を返しに来られた方とは、感想を語り合ってみたいと思った事も一度や二度ではない。

利用者の方々においては、館内でのルールをきちんと守って利用してくれる方が多く、業務を行う上で非常にありがたく感じた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

これからも本学の図書館が、利用されるの方々にとって知識や情報の収集に役立ち、研究活動をはじめとした生活全般に潤いを与えられる存在であればと願ってやまない。

後記

図書館報「みささぎ」第22号をお届けいたします。

まず、本図書館報にご投稿いただきました文学部史学科 寺崎保広教授（図書館長）、文学部文化財学科 塩出貴美子教授、本学大学院生 小松春菜様に御礼申し上げます。

昨年9月より、図書館業務が外部（丸善）への業務委託となりました。「凛として 賑やかに働きかける」をスローガンに、明るく楽しい図書館創りを目標としております。お気軽に声をお掛けください。

（編集担当）

発行：平成28年2月20日

編集：奈良大学図書館 奈良市山陵町1500